

---

# 運命と花言葉

きんう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命と花言葉

### 【Nコード】

N2665C

### 【作者名】

きんう

### 【あらすじ】

小さい時に分かれた二人が会つ。二人の印は一輪の花・・・  
少し切なくする予定です。

## 人物紹介（前書き）

初めて書いた小説です、広い心で見守ってやって下さい。  
題名とズレルかもしれませんがよろしく願います。

## 人物紹介

### 人物紹介

時村 祐一 ときむら ゆういち

緑心学園に通う17歳で、この話しの主人公的な存在  
面倒見はよいが、協調性は皆無  
花を育てるのが好き。

過去に子寺院に入っていた、その後今の親に引き取られる。  
成績は普通

篠本 一斗 しのもと いっつと

この話しの二人目の主人公的な存在  
明るい性格で、とても正義感が強い。  
しかし冗談や、悪戯が大好き。

一と同じ緑心学園に通う17歳  
成績は優秀

藤堂 遥 とうどう はるか

この物語の多分ヒロインで、感情変化が激しい17歳  
只今、染井総合病院に入院中で、一つ下の妹がいる。  
成績は・・・お世辞にもいいとは言えない

藤堂 静香 とうどう しょうか

遥の妹。

第二ヒロイン、姉とは正反対の性格??

と言つか、いつも眠そう。

只今16歳

成績は優秀

藤岡 ふじおかさとみ 聡美

緑心学園の教師で祐一や、一斗の担任。

通称フジさん

容姿綺麗だが・・・とても気性が荒い・・・  
嫌な事があると、いつも生徒を連れてカラオケ。  
年は本人いわく永遠の20歳・・・らしい

## 人物紹介（後書き）

お見苦しい点等ありましたらご指摘をお願いします。

## 序章（前書き）

ブログ的な感じですo(^-^o  
よろしく願いますm(\_)\_m

## 序章

桜が散り、木は緑の葉っぱを付けている

しかし、蝉の声はもう聞こえない、季節はもうすぐ秋になる。

そんな、風が心地よく吹く、小さな公園で一人の少年と一人の少女がベンチに腰かけている

もう日が傾きオレンジ色の光が辺りを包んでいる

「なくなよ」

「だってえ．．．ひつく．．．うつ．．．うつ」

「もお、泣き虫だなあ遙は」

「な、ひつく．．．泣き虫じゃな．．．ひつく．．．うつく．．．．．ないもん」

「もお．．．本当に、仕方ないじゃないか父さんの仕事の都合なんだから。  
だからもう泣くなって」



しかし、少女は以前として泣きやもうとはしない……

「もう、しょうがないなあ。

ちよっと待ってるよ」

少年はそう言って公園の近くの家に向かって走って行った

「あ、待って」

少女が慌てて停めたが、すぐ帰ってくるからと言って少年は家に入って行った

少しして少年がまた公園に姿を現した

「ほーら、これやるから、もう泣きやめよ」

「うつ・・うつ・・・・・ひつく・・な・・ひつく・・なあにこれ？」

男の子の手には一輪の花が握られている。

「これはな、ぷりむらって言う花だ」

「ぷりむらっ？」

「うん、ぷりむら」

「あ、ありがとう」

女の子は花をもらって満足そうに微笑んだ。

「じゃあ俺行くな」

「う、うん」

言葉では、うんと言っているが女の子はまた泣きそうになっている。

「だ〜か〜ら〜もう泣くなって。

あ、そうだ。いい事教えてやるよ」

女の子は今にも泣きそうになりながらも、こちらを、ウルンだ目でみている。

そして、今にも消えそうな声で小さく呟いた。

「いい事？」

「うん、花にはね花言葉があるんだよ」

「はなことば？」

「そう、花言葉。

でね、ぷりむらの花言葉は・・・・・・・・・・」

がばっ！！

「また、あの夢．．．．．」

一人の少女がベットから起き上がり、周りを見渡し、時計に目を向ける

時刻は8：00

「静香はもう居ないのね」

私は最近よくあの夢を見る．．．

とても懐かしい記憶

夢の先を思い出そうとしても思い出せない．．．

昔、好きなだった人との記憶．．．

ま、いつか思い出せるよね。

少女は少し納得したような表情で再びベットに潜ろうとした時

ぴゅぽゅぽゅ

外から救急車の音がケタタマシク響いて来る。

「こんな朝から事故？」

少女はベットから起き上がり、カーテンを開けて備え付けの冷蔵庫からペットボトルのお茶を取り出し、飲みながら部屋から救急車を見下ろす。

救急車からは一人の少年と少女がタンカで病院へ運び込まれている。そして、それを見ている少女の顔も青ざめていく。

「ブーーーー。」

し、静香あ！？

なんで、どうして？？」

見事にお茶が霧状になり中に消える

少女はかなりテンパリながらも、とりあえずナースコールを押す。

1分後、慌てて勢い良く看護婦が部屋に飛込んで来る。

「大丈夫ですか？？水無月さあ〜ん。

あ、あ〜〜〜」

慌てた看護婦はドアの段差につまづき、勢い良くヘッドスライディングをする。

それはもう見事な程に。

「あいた、た、た、」

「茜さん、大丈夫ですか」

「な、なんとかね」

茜さんと呼ばれた看護婦は腰を擦りながらゆっくり立ち上がった。

「もう、ホントに毎回、毎回よく飽きませんね」

少女は少し大きめのため息をついた。

「わ、私が悪いんじゃないんだからね。

この段差が……」

「ハイハイ、段差がね。

それ、もう10回以上聞きましたよ」

「え、そうだったかしら!?

ハ、ハ、ハ、まあ気にしない、気にしない」

茜は笑って誤魔化した。

「ホントにもう」

「ごめんなさい……」

所で何でナースコールを？

見たところ変わった様子は無いみたいだけど．．．．．？」

そこで、少女はまた顔が青ざめてきた．．．

「茜さん！！！！」

「は、はい」

「さっきの救急車で．．．」

「ああ、静香ちゃんの事？

心配無いわよ、どこも怪我して無いわ。

今は気絶してるけどね」

茜は落ち着いた口調で少し笑いながら、話した。

「そ、そうなんですか。

よかった．．．」

少女はホッと胸を撫で下ろした。

でも、そこで少女にひとつの疑問が浮かび上がった。

何で静香が救急車に?????

しかも、何で気絶?????

「あの茜さん……」

少女は顔を上げて茜の方を向く。

「ん、ふああに？」

茜は何故か煎餅を食べている

「あゝそれ私の煎餅」。

せつかく後で食べようと残してたのに……」

少女は少し目がウルンでいる。

茜はそれを見て……

もう半分も無いのを差し出して

「食べる？」

「もういいです……グスン」

少女は今にも泣き出しそうな顔だ……

「ホントにごめんなさい。  
許して下さい」

茜は、ふかぶかとお辞儀をした

しかし、少女は此方を向こうとはしない・・・

「ホントにごめんなさい、同じもの買って来てあげるから。  
許して、ね、ね？」

「本当？」

少女は少しウル目で此方に向き直った。

「ホントにホント」

何故片言？

まあ、そんな事はおいといて

「わーい、じゃあ、影屋の大福も付けてね」

「えー看護婦の給料も少ないんだぞ」

「食べた茜さんが悪い。それと、勝手に患者さんの物食べない方がいいよ」

「はい、以後気を付けます」

「うん、よろしい、な〜んてね。」



アハハ」

少女と茜はお互いを見て笑いあった。

茜は少しドジだが、いつも患者目線で物を見るのでとても人気ものだ。

だから、常に彼女の周りには笑いが絶えない。

「でさ、茜さん」

「なあゝにい？」

「何で静香は救急車で運ばれて来たの？」

「ああ、それはね．．．」

この病院から僕達の物語は始まった。

いや、もっと昔から始まっていたのかも知れない

ちょっと切ないストーリー

今朝の真実?? (前書き)

第一話ですm( \_ \_ ) m

m おかしな所もあるとは思いますがよろしく願いしますm( \_ \_ )

## 今朝の真実??

ここは染井総合病院

僕、時村祐一ときむら ゆういちは親友の篠本一斗しのもと いっどのお見舞いに訪れていた。  
307号室。ネームプレート『篠本一斗』

「ここだな」

僕は少し咳ばらいをして扉をノックした。

「どうぞ」

僕は中からの声を確認してから勢いよくドアを開けた。

「失礼します」

「祐じゃないか、よく来たな」

ベッドの上で本を読んでいた一斗は本を閉じて此方を向き笑った。

僕は元気そうな一斗を確認してホッと胸をなでおろした。

「よ、入院した割には元気そうだな。あ、これ見舞い品」

僕はそう言つて来る途中に買った一斗大好物のドーナツを渡す。  
一斗はとても嬉しそうな顔をした。

僕はなにげなく一斗の部屋を見回した。

一斗の部屋は白を基調とした普通の一人部屋で風通りがいい、心地よい部屋だった。

「お、サンキュ」

斗は僕が渡した箱の中からチョコが付いたやつを頬張りながら席を一つ出してくれた。

僕は一斗が出してくれたイスに腰を下ろした。

そして、朝の事を話し始める。

「でもあせったぜ。朝来ないからフケたのかなって思ってたら、フジさんが来て「篠本は朝、事故にあって入院しました」だからな。皆めっちゃ心配してたぜ。てか何で事故ったんだ？」

僕が聞いた時一斗は少し悩むような顔をしながら答えた。

「ん、それがさあ、今日さ、早く目が覚めていつもより早く家を出たんだよ。そしたらさあ、目の前を歩いてる女の子が突然車道側に倒れて、危ないと思って助けに飛込んで気がついたらベットで寝てたって感じかな」

そう言つて一斗は笑いながら新しいドーナツを頬張った。

僕も自分用に買ったドーナツを頬張りながら相づちをうつ。

「でも、お前スゲエよな。よく助けに飛込めるよ、俺だったら多分見てる事しか出来ないよ。」

「そんなことねえって、俺だって足ガクガクだったんだぜ？」

でもな、何か助けなきゃって思って、気がついたら体が勝手に動いてたんだ。」

「やっぱ本能ってやつ？」

「へえ、本能ねえ。」

でもやっぱ、本能でも助けに飛込めるだけ凄いなと思うよ。やっぱ一斗って昔から正義感だけは強いからな、スゲーよ」

「だけってのは余計だよ。」

でも、俺は正義感は強くねえよ。

だって俺は当たり前前事をしただけなんだからよ」

いや、それを当たり前と言うお前はやっぱりスゲーよ。

その当たり前前事を出来るやつは少ないと思うし、普通は出来ないと思うから……」

「いや、やっぱりお前はスゲーよ」

「凄くなんかねえよ」

一斗は少し照れながら笑った。

でも、なぜか一斗は事故の事を話す時に顔が少し曇った……

その些細な一斗の変化に気がついたなら僕はこの後、後悔しなかっただろう……

僕たちはそれから今日学校であった事等を話しあった。

いろいろ話している内に時計はすでに六時を指している。  
窓からはオレンジ色の光が差し込み少し眩しかった。

もうそろそろ帰ろうかと思って立ち上がろうとした時に僕は一斗に少し気になった事を聞いた。

「あ、そうだ。なあ、一斗」

「ん、どした？」

一斗は不思議そうな顔をして此方を向いた

「いや、大した事じゃないんだけど、その助けた女の子はどうなったんだ？」

それを聞いた瞬間一斗の顔が曇る・・・

その時僕の頭に最悪の状況がよぎった

まさかな・・・

そして、一斗は下を向いてうつむいてしまう・・・

僕はそれ以上聞くことも出来ず、僕も黙りこんでしまう・・・

どのくらい時間がたっただろうか．．．

既に日は落ちかけていて、オレンジ色の光は一層強く差し込んでき  
ていた。

僕はこのままじゃどうしようもないので、意を決して口を開いた。

「なあ．．．．．」

「祐、頼みがあるんだ．．．．．」

僕が喋るとほぼ同時に一斗が口を開き、僕の言葉を遮った．．．．

「なんだ？」

「向こうを向いてくれないか．．．．．」

僕は何も言わず向こうを向く．．．．

でも見てしまった、一斗の頬を流れる一筋の涙を．．．．

それから一斗が静かに語りだした．．．．．

「俺さ、気がついたらベットの上だったって言っただろ？」

僕はあえて返事も相づちも打たなかった、いや、打てなかったのかもしれない……

だから何も言わず、静かに一斗の話に耳を傾けた……

「俺が気がついた時にお袋が隣にいてさ、始めは泣いてただけで、何とかなだめて女の子の事聞いたんだ……」

一斗は声が少し震えていて……

僕はどうする事も出来なくて……ただ下をうつむく事しか出来なくて……

とうとう僕の目にも涙が溢れてきた……

でも、僕が泣くわけにもいなくて……

僕が泣いたら一斗の頑張りが無駄になるから……

「でもさ、お袋も詳しくは知らなくて病院の人に聞こうと呼ぼうとした時に、知らない女の子の人が入って来て、突然俺にお礼を言ったんだ……」

「……ありがとう」  
「……始めは何の事だろうと思ったんだけど途中で気が付いたんだ……」

「……でさ、その人は案の定女の子の母親で、その人の話によると……」  
「……女の子は出血多量で俺が起きる数時間前になくなったんだって……」



俺さ、それ聞いた時不思議と平気だったんだ。でも、一人になって時にさ．．．多分自分が情けなかったんだと思う、突然涙が止まなくてさ．．．全然知らない子なのに

なんで、助けられなかったんだろう．．．

なんで、俺が生き残ったんだろう．．．

そんな事ばかり考えてさ、不安に押し潰されそうで．．．」

「ゆう?」

気がついたら僕は一斗を抱きしめていた。

「もういいよ．．．」

「祐．．．」

「一斗がもう苦しむ必要はないんだ」

「ありがとう．．．」

全部が終わった時、時刻は既に八時前で．．．

「じゃあ、俺そろそろ帰るわ」

「えゝもう帰るのかよゝもうちょっと居ろよゝ」

「無理だよ、俺明日も学校あるし．．．．」

「ちえ、わかったよ」

「一斗は渋々了解した。」

「また明日来てやるからよ」

「じゃあ明日もドーナツで」

「考えとくよ。じゃあな」

「おう、また明日」

僕は一斗の病室を後にした。

病室を出て自転車置き場の辺りである事を思い出した

あ、そうだ．．．．フジさんから一斗にプリント渡すよう頼まれて  
たっけ．．．．

今から戻るのはめんどいなゝ．．．．けど渡さないと一斗困るだろ  
うし．．．．

まあ、届けてやるか

僕は早足で一路一斗の部屋へと向かった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2665c/>

---

運命と花言葉

2011年1月16日02時55分発行